文京学院大学人間学部研究紀要 Vol. 23, pp. 185 ～ 195, 2022. 3

愛着の問題と発達性トラウマ障害の理論
―福祉サービス提供組織での安定したサービス提供に向けて―

田嶋　英行*

Key words：感情，愛着，ソーシャルワーカー，発達性トラウマ障害，マネジメント

Ⅰ．はじめに

ソーシャルワークの領域，とりわけ，かつてケースワークと呼ばれてきた個別援助技術においては，クライエントとの間で形成される関係性構築の原則として，Felix Biestek による「ケースワークの原則」が尊重されてきたという経緯がある．この「原則」は，ケースワーカーがクライエントとの間でいかに援助関係を形成するかについて述べたものであり，複数のものから成り立つとされている．それらはすなわち，1）クライエントを個人として捉える，2）クライエントの感情表現を大切にする，3）援助者は自分の感情を自覚して吟味する，4）受けとめる，5）クライエントを一方的に非難しない，6）クライエントの自己決定を促して尊重する，7）秘密を保持して信頼感を醸成する，以上の 7 つである（Biestek,1996）．「ケースワークにおける援助関係は，多くの点でそれ以外の人間関係とは異なっている」（Biestek,1996, p.7）のであり，改めて形成していく必要があるが，これらは「いずれも援助関係を構成する性質であり，要素であると考えることができる」（Biestek,1996, p.28）ものであり，「ケースワーカーの援助行動に何らかの影響や指針を与え，ワーカーの行動を導く」（Biestek,1996, p.28）ことになってくる．

本稿ではこれら 7 つの原則のうち，3）の「援助者は自分の感情を自覚して吟味する」に注目していく．なぜなら筆者自身が，この原則こそが他の 6 つの原則の基盤になると考えるからである．他の 6 つの原則では，クライエントを 1）個人として捉え，2）その感情表現を大切にし，3）受けとめ，4）一方的に非難せず，5）その自己決定を尊重し，6）その秘密を保持することが求められる，と述べている．つまり一言でいうならば，クライエントを「尊重（リスペクト）」することの重要性について言及している，と考えられるのである．一方でこの原則（つまり「援助者は自分の感情を自覚して吟味する」）は，クライエントがそのように「尊重（リスペクト）」されていると感じることを可能にするケースワーカー自身の適切な「反応」（Biestek,1996,p.78）について述べている．すなわち，この「反応」自体が適切でなければ，そもそもクライエントは自身が「尊重（リスペクト）」されているとは感じないだろうし，したがって先の 6 つの原則も充分には機能し得ないだろう，と考えられるのである．Biestek による「ケースワークの原則」は，現在の日本における福祉サービス提供組織でも，利用者に対してより安定的なサービスを提供していく際に必要なもの，と考えられることになる．

一方でケースワーク実践にせよ，もしくは福祉サービス提供組織におけるサービス提供にせよ，現場の職員には感情労働が求められてくる．ここでいう感情労働とはすなわち，「公的に観察可能な表情と身体的表現を作るために行う感

＊人間学部人間福祉学科

情の管理」（Hochschild,2000, p.7）である．Arlie Hochschild はこのことについて，以下のように述べている（Hochschild, 2000, p.7）.

> この労働を行う人は自分の感情を誘発したり抑圧したりしながら，相手のなかに適切な精神状態―この場合は，懇親的で安全な場所でもてなしを受けているという感覚―を作り出すために，自分の外見を維持しなければならない．この種の労働は精神と感情の協調を要請し，ひいては，人格にとって深くかつ必須のものとして私たちが重んじている自己の源泉をもしばしば使いこむ.

Biestek における 3）の「援助者は自分の感情を自覚して吟味する」は，まさにここでいう感情労働に該当すると考えられるのであり，つねに自らの感情に注意しつつ，クライエント側からみて自分自身が適切に「反応」できているかチェックしていくことが求められてくる．現場における個々のサービス提供者（ソーシャルワーカー）には，自らの感情を適切にマネジメントしていくことが必要なのである．先の Hochschild も，以下のように述べている（Hochschild,2000, p.176）.

> ソーシャルワーカーや保育者，医師，そして弁護士は，それぞれの職務遂行において人との接触を持ち，他者の感情に影響を及ぼそうと努めている．しかし彼らには，その感情労働を監視する直接的なスーパーバイザーは存在しない．彼らは自分の感情労働を，非公式な職業規範と顧客からの期待とにつき合わせながら，自ら監視しているのである.

ここでいう「非公式な職業規範」とはつまり，ソーシャルワーカーの場合であれば，先に挙げた Biestek による「原則」のようなものと考えてよいだろう．やはり，「自ら監視」することが求められるのである．また福祉サービス提供組織の管理者（マネジャー）には，個々のサービス提供者（ソーシャルワーカー）が充分に自身の感情をマネジメントできているか，さらにマネジメントすることが求められてくる.

ただし個々のサービス提供者（ソーシャルワーカー）に自身の感情のマネジメントを求めても，本人の意図に関係なく，本質的に難しいことがある．それは個々のサービス提供者自身に愛着（attachment）上の課題があると考えられる場合である．つまりその際にはクライエントに対峙した場合に，適切な「反応」が困難になることが想定されるのである．とりわけ本人が成長してくる過程で受けてきた発達性トラウマ障害がある場合，適切な「反応」ができないことがあると考えられる.

発達性トラウマ障害とは，すなわち「幼少期の慢性的なトラウマによって生じる心身の不具合のこと」（花丘 ,2020, p.11）である．そしてそれは，不適切養育や虐待などによって，「親からの十分な愛情を受けられなかった」（花丘 ,2020, p.11）などが原因で生じると考えられている．いわゆる「愛着障害」も，この「発達性トラウマ障害の一つ」（花丘 , 2020,p.11）といえる.

通常においてトラウマという用語は，大きな精神的ショックなどが原因となって生じる「心の傷」を意味するが，親などによる不適切な養育が継続することによって起こるとも考えられるのであり，これがすなわち発達性トラウマ障害である．もちろん不適切な養育は，その一つひとつは大規模な自然災害や暴力，犯罪といったものほどのインパクトはないかもしれないが，「毎日じわじわと起きた体験が, 塵も積もって山となり」（花丘 , 2020, p.59），「身体の中に刻み付けられ」（花丘 ,2020, p.60），結果としてそれ自体がそのひとの心身をコントロールし続けていく[1].

本稿では，ソーシャルワーク機能を含む福祉サービス提供組織において，愛着[2]の問題や発達性トラウマ障害[3]について，愛着理論や発達性トラウマ障害の理論をもとに，どのように捉えていけばよいのか論じていく．とりわけ後者，すなわち発達性トラウマ障害については，ポリヴェーガル理論（Polyvagal Theory）を参照しつつ述べていく．なおこの理論は，トラウマ体験がそのひとの神経系に大きな影響を与えることになり，結果としてそれが心身の不調をもたらす，と考えていくものである.

Ⅱ．愛着の問題と発達性トラウマ障害

John Bowlby は，「子どもを大事に世話すること」（Bowlby,1993, p.1）の重要性を強調している．さらに，以下のように述べている（Bowlby,1993, pp.1–2）．

> ほとんどの人間は，一生のどの時点かにおいて子どもを持ちたいと熱望し，また，その子どもたちが，健康で，幸福で，自立した人間に育って欲しいと熱望すると，私は信じている．そのことに成功した人々にとっては，見返りは大きいものであるが，子どもを持っていても，その子どもたちを健康で，幸福で，自立した人間に育てられなかった人々にとって，不安，苛立ち，軋轢，そして多分，恥や罪悪感といったペナルティは厳しいものであるかもしれない．だから，親であることを引き受けるということは，大きな賭けである．

Bowlby によるこの言葉は，親を含む養育者の子どもに対する責務の重さを表していると考えられるだろう．何はともあれ，子どもがより自律的に生きていくことができるようになるためには，まずは他者との間で，愛着をめぐる深い欲求が充足されることが必要となる．そもそも，子どもが一人きりで生き延びていくのは不可能なのであり，成長し，発達を遂げていくためには，他の誰かに安全と安心を提供してもらう必要がある．具体的には，子どもが他者との間でより健やかな愛着を形成していくためには，以下が求められてくる．

まず，「安全でいられる場所（安全基地）」が必要である．子どもが強いストレスを受けた場合，子ども自身が戻ることのできる安全な場所が求められてくる．養育者によって慰めてもらえるところがあれば，子どもにとってはそこが安全な場所となるのである．Bowlby によれば「この役割は，軍隊の基地から指令を送っている司令官の役割と似通っている」（Bowlby,1993, p.14）のであり，養育者はいわば司令官の役割を担っており，遠征隊としての子どもは司令官自身が，「基地が安全であるという自信をもっているときにのみ果敢に前進でき，危険を冒すことができる」（Bowlby,1993, p.14）のである．

つぎに，「安心の基盤」である．子どもは「怖い思いをしたり，疲れ切ったり，病気になったときにもっとも顕著であり，慰められたり，世話されることでしずまる」（Bowlby,1993, p.33）のである．子ども自身に，そのような対象（養育者）がいて「応じてくれることを知ることは，強い安心感を与え，その人物との関係を大切にし，継続するように促」（Bowlby,1993, p.34）していく．さらに子どもは，「安全でいられる場所（安全基地）」や「安心の基盤」をもとに，次第にそのような対象から「離れて，探索したがる」（Bowlby,1993, p.154）ようになる．また「びっくりしたり，不安であったり，疲れていたり，あるいは気分が悪いとき」（Bowlby,1993, p.154）には，対象への「接近の衝動を感じる」（Bowlby,1993, p.154）ようになっていく．子どもがより健やかに成長していくためには，「安全でいられる場所（安全基地）」や「安心の基盤」，さらにはそれらをもとにした対象への接近性が求められてくる．これらをもとに，他者との間で安定した愛着を形成していく，と考えられるのである．

子どもが養育者との間で安定した愛着を築くことができなかった場合，不健全な愛着関係が形成されてしまうことがある．Bowlby によれば，「病因となるような子ども時代の状況やできごと」（Bowlby,1993, p.189）として，以下のものが挙げられるという（Bowlby, 1993, pp.189–91）．

1. 子どもを支配する手段として「もう愛さない」と脅かすこと．
2. 子どもを「見捨てる」と脅かすこと．
3. 「自殺する」と脅かすこと．
4. 否認と不確実化．

なお 4 の「否認と不確実化」は，養育者が実際におこなったことを認めなかったり，もしくは子ども自身が見聞きしたことを認めようとしなかったりすることである．このようなことは，子どものパーソナリティの発達自体に不利な影響を与え

るようになる，と考えられるのである．

さらにそのような影響が子どもの側において，「どのような特徴を持った神経経路が発達していくか」（Kain and Terrel, 2019, p.79）を決定づけていく，と考えられることになる．両者の間で愛着形成がうまくいっていないと，「決して癒されることのない恐れを抱き，満たされることのない，生き残りをかけた反応を繰り返」（Kain and Terrel, 2019, p.79）していく．親などによる不適切な養育は，子どもとの間に愛着不全をもたらし，結果として子ども自身に不適切な「反応」を定着させていくのである．そして「毎日じわじわと起きた体験が, 塵も積もって山となり」(花丘,2020, p.59)，「身体の中に刻み付けられ」（花丘 ,2020, p.60）ていき，それ自体が延いては発達性トラウマ障害となっていく．

また花丘ちぐさは，養育者自身に何らかの「発達障害」があると考えられる場合について，以下のように述べている（花丘 ,2020, p.175）．

> 「発達障害」を抱えた大人が，周囲にさまざまな波紋をもたらすということが近年注目されています．「共感性に乏しく, 衝動のコントロールが難しい」など，子を育てる立場としてどうなのかと思われる言動をとる親もたくさんいます．親自身が不適切養育を受けてきた場合，現在起きている問題の原因が親自身の発達障害なのか，あるいは不適切養育のために発達性トラウマを負ったことなのか，非常にわかりにくいと言えます．

このように，不適切な養育の原因が親の「発達障害」にあると思われる場合も，充分にあり得ると考えられるのである．

Ⅲ．発達性トラウマ障害とポリヴェーガル理論

ポリヴェーガル理論は，Stephen Porges によって提唱されたトラウマ障害についての理解と治療の理論である．先に，養育者といった他者との間で安定した愛着を築くことができなかった場合，不健全な愛着関係が形成されてしまうことがあり，そしてその影響が子どもの側において，「どのような特徴を持った神経経路が発達していくか」（Kain and Terrel, 2019, p.79）を決定づけていくと述べたが，Porges はこのような現象について神経系の研究者の観点から，トラウマという体験について研究している人物である．Porges によればこの理論の特徴は，まず以下の点にあるという（Porges,2018, p.22）．

> ポリヴェーガル理論では，「安全」であることの重要性に焦点を当てている．我々は危険を察知すると，脅威に適応するための反応を起こす．そして，こうした脅威に対する反応が起きてくると，生理的状態，社会的行動，心理的体験，そして健康に影響が及ぶ．本理論では，こうした一連の作用機序について，神経生物学的な説明を提供している．

これまで人間が何らかのストレスに直面した場合，その神経系の反応としては，「戦うか」もしくは「逃げるか」というものだけである，と考えられてきた．たしかにそのような場合には，自律神経系の１つである交感神経が活性化し，アドレナリンが分泌されストレス反応が生じる．しかしポリヴェーガル理論では，そのような場合，ストレス反応とは異なった防衛反応が起きると考えていく．

旧来の考え方では人間が生命に脅かされたとき，たしかに神経系の健康を維持する能力が阻害されることによって，自律神経や免疫，内分泌系が不調となり，心身ともにさまざまな疾患を抱えやすくなっていく．一方でこのような考え方においては，「欠けている要素」（Porges,2018, p.32）がある，という．それは「二番目の防衛システムがある」（Porges, 2018, p.32）ということであり，つまり「『不動』,『シャットダウン』そして『解離』」（Porges,2018, pp.32–3）があるということについてである．

そもそもポリヴェーガル（polyvagal）とはすなわち「複数の迷走神経」，さらに正確にいうならば「複数の迷走神経経路」を意味している（Porges,2018, p.122）．自律神経系の１つである交

感神経については「戦うか」もしくは「逃げるか」といった反応を引き起こすこともあり，これまで「なんとか制御しなくてはならないもの」（Porges,2018, p.123）と考えられてきた．もうひとつの副交感神経，その主要な神経経路が迷走神経であり，「迷走神経と副交感神経は，ほぼ同じ意味で使われてい」（Porges,2018, p.122）るが，これにはこれまで,「つねに『健康』,『成長』および『回復』を支持」（Porges,2018, p.123）していると考えられてきており, いわば「善玉」（Porges,2018, p.123）として扱われてきている．一方でこの副交感神経としての迷走神経には，「防衛反応系の一部として使われる」（Porges,2018, p.123）特徴をも併せ持っている．Porges はこの迷走神経における「防衛反応」の一例として，以下のように述べている（Porges,2018, p.123）.

> 実際，ネコに咥えられているネズミは，どんなふうに見えるでしょうか？呼吸は停止し，心拍は非常に遅く，死にかけているか，死んでしまったかのようです．こうした反応はすべて不随意です．副交感神経系の一部である迷走神経によって行われるこうした制御を見れば，副交感神経の影響は良いものだけだという解釈は間違いだということがわかるでしょう.

このように Porges は，迷走神経が必ずしも「善玉」としてのみ位置づけられるわけではない，と述べている. この迷走神経における「防衛反応」は，生物としてはかなり古いものと考えられている．「人間の祖先の自律神経は，おそらく，カメのそれに近かった」（Porges,2018, p.97）のではないかとも考えられるのであり，なぜならカメが最初におこなう防衛反応が，「シャットダウンして頭まで引っ込めて」（Porges,2018, p.97）しまうというものだからである．人間を含む哺乳類も，「この太古の神経系のシャットダウン反応を受け継いだので，私たちの神経系の中にもこれが埋め込まれて」（Porges,2018, p.97）いると考えられるのである．さらに Porges は，実際にトラウマを持つ人たちについて，以下のように述べている（Porges,2018, p.92）.

> トラウマを持つ人たちは，自分たちがとった反応をどのように説明するでしょう？　ストレスにさらされているなら，心臓は速く打ち，緊張が感じられます．しかし，トラウマや虐待を体験した人からは，こういう反応をしたとはあまり聞きません．トラウマからの生還者は，トラウマ体験をしたり虐待を受けたとき，シャットダウンし，筋肉は緩み，失神したり解離していた，などと描写することが多いのです.

このように人間の神経系の仕組みからみた場合，トラウマを生じさせる何らかの出来事に直面した際には，1）交感神経による「戦うか」もしくは「逃げるか」という行動をとるか，2）副交感神経における迷走神経による「シャットダウン」，という複数の選択肢があると考えられることになる.

Ⅳ. 自律神経系における３つの系統

自律神経系には交感神経と副交感神経の 2 つがあり，後者における迷走神経には従来からいわれていた「善玉」としての機能，すなわち「つねに『健康』,『成長』および『回復』を支持」（Porges,2018, p.123）するという特徴がありつつも, 一方で「『不動』,『シャットダウン』そして『解離』」（Porges,2018, pp.32–3）するといったものも，同時に有していると考えられるのであった.

副交感神経における「善玉」としての機能は，腹側迷走神経と呼ばれる系統が担っており，「哺乳類にしか見られず，社会交流システムに関わる活動を支えている」（Kain and Terrel,2019, p.107）．これは，交感神経の特徴すなわち「戦うか」もしくは「逃げるか」といった働きをうまく抑える，いわばブレーキの役割を担っている．つまり，それ自体が「暴走」することを回避し，無駄にエネルギーを浪費せずに済ますことができるようになる．「この生理学的基盤を活用できると，我々は生産的で社会的行動をとることができる．このブレーキ機能をうまく活用していくことによって，「関係性とつながりを維持しながら他の人たちと関わる能力を発揮することができる」（Kain and

Terrel,2019, p.108）のであり，「身体的資源を温存することができる」（Kain and Terrel,2019, p.109）ようになっていく．

一方で迷走神経における負の部分である「シャットダウン」機能については，背側迷走神経と呼ばれる系統が担っている．先にも述べたようにこの機能自体は，生物の進化の過程においてもかなり「太古」のものを，人間を含む哺乳類が受け継いだと考えられることになる．この現象は，「生命が危機にさらされた」（Kain and Terrel, 2019, p.111）と感じた場合に生じる．Kathy Kain と Stephen Terrell はこのことについて，以下のように述べている（Kain and Terrel,2019, pp.111–2）．

> このような状況では，心拍数と呼吸数が急激に下がり，筋肉が不動化され，痛みの閾値が上がる．こうした生理学的状況では，我々は傷の痛みを感じないようにするために，痛覚を麻痺させ，鎮痛性の物資を分泌し，生き延びる可能性を少しでも増やそうと反応する．捕食動物の多くは，動いているものに向かって捕食行動を起こす．したがって「擬死」（シャットダウン）とも呼ばれる不動化反応が起き，身体が動かなくなると，生き延びる可能性が高まる．

「シャットダウン」の反応については，とりわけサバンナで生活する草食動物にとって有利なものであったと考えられる．肉食動物に食べられそうになった場合，「痛みや恐怖を感じる代わりに，静かに最期を迎えることができ」（花丘 ,2020, p.73）ると考えられるのであり，また肉食動物は「動かなくなってしまった獲物に興味を失う」（花丘 ,2020, p.73）こともあり，その場合には命拾いの可能性も少なからず出てくる．さらに大自然に生きている動物は，このような反応から「自然に抜け出す」（花丘 ,2020 , p.77）と考えられている．たとえばライオンに襲われたシマウマは，窮地から脱したあとに，「しばらく身体を震わせると，何事もなかったかのようにまた草を食べ始め」（花丘 ,2020, p.77）るという．人間ほど脳が発達していないので，その後において「『身体を震わせるなんて恥ずかしい』と感じたり，『ライオンにまた追いかけられたらどうしよう』と未来を予測して不安になったりすることがない」（花丘 ,2020, p.77）ため，すぐにもとの状態を取り戻すことができる．

一方で人間の場合は脳が高度に発達しているため，かりに「生命が危機にさらされた」（Kain and Terrel,2019, p.111）と感じる状態から脱することができても，「どんな小さな音を聞いても，『あのときに攻撃されたのと同じ状態ではないか』と考えて飛び上がり，怖がるように」（花丘 , 2020, p.78）なったり，また「神経系の常時警戒モードが解かれることがないため，食欲や睡眠，生殖能力などにも影響を及ぼ」（花丘 ,2020, p.78）すことになったりする．

またこのような場合，ほんの小さな出来事によっても「なんとか持ちこたえていた神経系のバランスが，一気に崩れてしまうこと」（花丘 ,2020, p.97）がある，と考えられる．花丘はこのことについて, 以下のように述べている（花丘,2020, p.98）．

> たとえば，上司からの叱責やハラスメントなどによる精神的ショックから，一気に心身のバランスを崩してしまうこともあります．精神力が弱いとか，根性がないなどと言われてしまうこともありますが，そのかげに発達性トラウマがあり，すでに限界を迎えていた神経系に，こうした対人関係の刺激が最後の決定打となっていた可能性があります．

このような副交感神経，とりわけ背側迷走神経による反応は，そもそもが「自律」神経系の働きによるものであり, したがって本人の意思（意志）ではコントロールが効かないものと考えられるのである．さらに Porges は，性的な虐待や身体的な虐待を受けた児童について，以下のように述べている（Porges,2018, p.47）．

> 被虐待児が動けない状態に置かれた場合，そうしたトラウマを扱うセラピストであれば，被虐待児が，「自分はそこにいなかった」というような心理的な状態を述べるのを聞いたことがあるでしょう．彼らは，解離したか気を失って

おり，身体は何も感じなくなっていたのでしょう．こうした被虐待児は，トラウマ的な出来事によって引き起こされる身体的心理的な苦痛を緩衝する，適応的な反応を行ったのです．

これらのことは，まさに「『不動』，『シャットダウン』そして『解離』」（Porges,2018, pp.32–3）の現象が実際に生じたものと考えられるだろう．

Ⅴ.「攻撃的」タイプと「凍りつき」タイプ

先にみたように，自律神経系には交感神経と副交感神経の 2 つがあり，後者における「善玉」としての機能は腹側迷走神経が担っており，「哺乳類にしか見られず，社会交流システムに関わる活動を支えている」（Kain and Terrel,2019, p.107）と考えられる一方で，その「負の部分」としての「シャットダウン」機能は，背側迷走神経が担っていると考えられるのであった．ひとには「攻撃的なタイプ」と「凍りつきやすいタイプ」があるものの，ポリヴェーガル理論にもとづいて考えるならば，「実は虐待あるいは不適切養育，あるいはその他の要因によって発達性トラウマを抱えてしまった人に共通する特徴」（花丘 , 2020, p.106）であると想定され得るのであり，「根っこの問題は同じと言ってよい」（花丘 ,2020, p.106）．

ひとが周囲を安全と検知したとき，神経系も副交感神経における腹側迷走神経内に収まることになる．

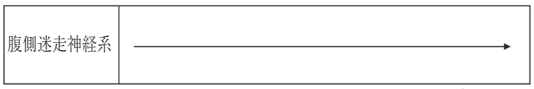

図１　周囲が安全な場合の神経系の働き [4]

一方で発達性トラウマ障害を抱えているひとが，何らかのトラウマ的出来事に直面したとき，もしくはそのような状況を想起させる場面に直面したとき，神経系が乱高下したり，また交感神経内に「高止まり」したり，さらには副交感神経の背側迷走神経内に「低止まり」したりする．もしくは，交感神経内での「高止まり」と背側迷走神経内での「低止まり」の両者がみられる状態になることもある．

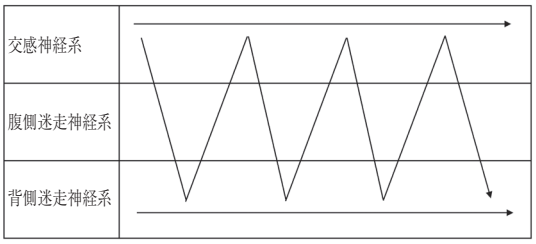

図２　神経系の乱高下、および「高止まり」と「低止まり」[5]

自律神経系の働きなので，ここでみてきたような神経系の 1）乱高下，2）交感神経内での「高止まり」，3）背側迷走神経内での「低止まり」，4）交感神経内での「高止まり」および背側迷走神経内での「低止まり」の同時発生といった諸々の現象については，それらのいずれも，当人にとってはそもそもコントロールできないものである．本人からすれば，そのような状態に勝手に陥ってしまっているのであり，かつそういった事態は，あたかも自分が自分でないかのように感じる「疎外」の体験として，捉えられ得ることになるだろう．つまり，そのような自分の意思（意志）を越えたところでの現象を，何かよそよそしく，さも他者に起きている出来事であるかのように感じるのである．

Biestek による 7 つの原則のうち，「援助者は自分の感情を自覚して吟味する」において検討すべきは，あくまで援助者が自覚できる感情に限られてくる．自覚できないものは，そもそも吟味しようがない，のである．援助者が発達性トラウマ障害を抱えていて，先にみたような神経系の 1）乱高下，2）交感神経内での「高止まり」，3）背側迷走神経内での「低止まり」，4）交感神経内での「高止まり」および背側迷走神経内での「低止まり」の同時発生といった諸々の現象が自身に生じている場合には，その「感情」自体を統制できないことがある，と考えられる．結果として，クライエントを 1）個人として捉え，2）その感情表現を大切にし，3）受けとめ，4）一方的に非難せず，5）その自己決定を尊重し，6）その秘密を保持することができない場合，一言でいうならば，クライエントを「尊重（リスペクト）」することができなくなっているのであれば，そのような援助者を抱える組織自体，ある一定のリスクを抱え

ているといえるだろう．

Ⅵ．福祉サービス提供組織での安定した諸サービスの提供

2021 年度から，社会福祉士養成課程のカリキュラムが新しいもの（新カリキュラム）に移行しつつあり，指定科目の名称も新しいものに変更されているが，それまでの（旧カリキュラムの）科目名をみると「高齢者に対する支援と介護保険制度」，「障害者に対する支援と障害者自立支援制度」，「児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度」，「低所得者に対する支援と生活保護制度」といったように，各領域における諸制度を活用することによって利用者を支援するといった「構図」を表現している科目名，または「保健医療サービス」や「就労支援サービス」といったようにサービスの提供そのものを表していえる科目名が多くみられる．社会福祉士のようないわゆるソーシャルワーカーは，何らかの組織に属しながら諸制度を活用しつつ，支援やサービスを提供していくことになる．ただしその場合，その支援やサービスの質（クオリティ）の保証は，福祉諸サービス提供組織の管理者（マネジャー）に委ねられることになってくる．このことを図式化すると，以下のように表記し得ることになる．

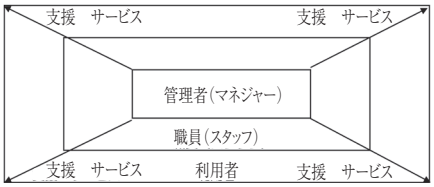

図３　福祉諸サービス提供組織における支援とサービス

この図にみられるように，福祉諸サービスを提供する組織の中心には管理者（マネジャー）が存在するのであり，その周囲に支援やサービスを提供する職員（スタッフ）がおり（ここにソーシャルワーカーも含まれる），さらにその周縁に利用者が存在している，とも考えられることになる．したがって管理者からみた場合，利用者に対して一定の質の援助やサービスを提供するためには，まずはそれ自体を提供し得る職員（スタッフ）を揃えることが求められるのであり，必須の事項となってくる．

先に援助者が発達性トラウマ障害を抱えているために，クライエントを「尊重（リスペクト）」することができなくなっている場合，そのような援助者（すなわち，職員もしくはスタッフ）を抱える組織自体，ある一定のリスクを抱えている可能性について述べたが，管理者はこのことについて充分に認識しておくことが求められるだろう．Tom Voss と Rebecca Nguyen は，Voss 自身がその父親から聞いた話として，以下のように述べている（Voss & Nguyen,2021, p.35）．

> おやじは 32 年間ソーシャルワーカーをしていた．自分も同じ道に進んでみてもいいかもな，くらいに思い始めた頃，おやじに言われたことがある．ソーシャルワーカーは 2 つの人種に分けられる．1 つは純粋に人助けをしたいと思っている人種．もう 1 つは，本人自身が病んでいて，その理由を生涯解明できない人種．後者にとって，他者の問題と向き合うことは，おぞましいほど根深い自分自身のトラウマを検分する手段にすぎない．自分の問題を患者に投影することで，あるいは患者の問題に注目し自分の問題から目を逸らすことで，患者のカウンセリングを利用して自身のセラピーをしているのだという．私がどちらの人種のソーシャルワーカーになるか，おやじには想像がついていたのだろう．

もちろんこの内容については，あくまで Voss 自身の父親における個人的な体験にもとづくものであり，何らかの客観的なエビデンスにもとづいたものではないものの，一方で筆者は，検討するに充分値する言説であると考えている．また援助者自身が発達性トラウマ障害を抱えていた場合，何らかのトラウマ的状況，もしくはそのような状況を想起させる事態に直面したとき，神経系の 1）乱高下，2）交感神経内での「高止まり」，3）背側迷走神経内での「低止まり」，4）交感神経内での「高止まり」および背側迷走神経内での「低止まり」といった諸々の現象が

生じると考えられるが，先に述べたようにそれらはそもそも，その当人にとってコントロールできないものと考えられる．

さらにこのような状況は，本人を極度に疲弊させることになるだろう．そして，いわゆる「燃え尽き」といった状態にもなっていく，とも考えられるのである．Gideon Kunda によると「燃え尽き」には，以下のような現象がみられるという（Kunda,2005, p.302）．

> ほとんどの従業員が認めているが，燃え尽きの一つの兆候は人前で自分を抑えられなくなることだ．あるマネジャーは言う．
>
> 僕のガールフレンドは技術系で，テックで働いている．彼女は燃え尽きてしまった．ホントの意味で，燃え尽きてしまったんだ．人とケンカするし，下品な言葉をわめきちらすし，お決まりの道さ．まっ，ノイローゼになっちゃったんだ．ただでさえ仕事に感情的になりやすい人だからね．毎朝体がぶるぶる震えるようになり，人でいっぱいのオフィスに足を踏み入れることができなくなった．僕にもそんなことがあったよ．

なおここでいう「テック」とは，すなわちハイテク企業のことであるが，このようなことは感情労働が求められてくる福祉サービス提供組織においては，なおさら生じやすい事象とも考えられるだろう．

先の図 3 のような構図を想定するならば，Voss と Nguyen が述べているように援助者（すなわち，職員もしくはスタッフ）において，ある一定数の「本人自身が病んでいて，その理由を生涯解明できない人種」（Voss & Nguyen,2021, p.35）が存在しているとするならば，利用者に対して一定の質の援助やサービスを提供するために，管理者（マネジャー）には何らかの対応をおこなっていくことが求められてくる．

Ⅶ．おわりに

これまで述べてきたことは，ソーシャルワーカーを有する福祉サービス提供組織についてであるが，同じことは教育サービスを提供する小学校や中学校，高校，大学といった教育機関でもいえるだろう．福祉サービス提供組織にせよ，教育サービス提供組織にせよ，それらのサービスを受ける利用者や児童，生徒もしくは学生は，サービスを提供する側よりも総じて弱い立場に置かれている場合が多い．いわゆる「ハラスメント」が生じやすい状況に置かれていると考えられるのである．管理者には，サービス提供を受ける側が一定の質のサービスを受けることができるよう，何らかの措置を講じていくことが求められてくる．

発達性トラウマの難しいところは，これまで述べてきたように，本人にもコントロールすることができないという点である．管理者（マネジャー）は，職員（スタッフ）自身が「病んでいて，その理由を生涯解明できない」（Voss & Nguyen,2021, p.35）と考えられる場合であっても，本人がその理由を自覚していく可能性を追求する必要があるのではないか．そのような場合，たしかに「他者の問題と向き合うことは，おぞましいほど根深い自分自身のトラウマを検分する手段」（Voss & Nguyen,2021, p.35）に過ぎず，また「自分の問題を患者に投影することで，あるいは患者の問題に注目し自分の問題から目を逸らすことで，患者のカウンセリングを利用して自身のセラピー」（Voss & Nguyen, 2021,p.35）をしているとしても，一方で「自分自身のトラウマを検分」（Voss & Nguyen, 2021,p.35）したり，もしくは「自分の問題を患者に投影」（Voss & Nguyen, 2021, p.35）したり，さらには「患者の問題に注目し自分の問題から目を逸ら」（Voss & Nguyen, 2021, p.35）したりしているということを，本人がより客観的に自覚できるようになれば，事態を少なからずより良い方向に変えられるだろう[6]．そしてそれを可能にするためには，当の本人が発達性トラウマを含むトラウマ全般について学ぶ機会が必要になってくるのであり，また少なくとも，彼ら彼女らをマネジメントする管理者（マネジャー）には，その

メカニズムを充分に理解しておくことが求められるのではないだろうか[7].

注

1） また複雑性 PTSD という概念もあるが，これは PTSD にみられる 1）心的外傷となった出来事の再体験，2）心的外傷となった出来事に関連する思考や記憶の回避，3）現在でも脅威が存在しているかのような持続的な感覚に加え，さらに 4）感情コントロールの問題，5）自分はとるに足らない，打ち負かされた，または価値がないという持続的な思い込み，6）人間関係を維持することや人と親密であると感じることの困難といったことが生じると考えられている（青木 , 2020, pp.44–5）.

2） 今日における代表的なソーシャルワークアプローチを収録している Francis Turner（編）Social Work Treatment（第 6 版）においては，ソーシャルワーク理論における愛着の問題について，Timothy Page が論じている（Page, 2017, pp.1–22）.

3） 今日における代表的なソーシャルワークアプローチを収録している Francis Turner（編）Social Work Treatment（第 6 版）においては，ソーシャルワーク理論におけるトラウマの問題について，Dennis Kimberley と Ruth Parsons（Kimberley & Parsons, 2017, pp. 553–73） および Diane Mirabito（Mirabito , 2017, pp.117–30）が論じている.

4） なおこの図は，花丘ちぐさの見解（花丘 , 2020, pp.106–7）を参考に，筆者自身が図式化したものである.

5） なおこの図は，花丘ちぐさの見解（花丘 , 2020, pp.106–15）を参考に，筆者自身が図式化したものである.

6） Anabel Gonzalez は，「乳幼児期からの複層的な傷つき体験による解離を抱えた心理状態」（大河原 , 2020, p.1）にある人びとについて，以下のように述べている.「自分の時間は，有用な仕事や他者の問題を支援するためにのみ使うものだと考えている人たちがいます. 目的もなく，単に自分の楽しみのために何かをすることには，罪悪感や不快が生じてしまうので，自分にそれを許すことできないのです．繰り返しになりますが，幼い頃に必要だった生存戦略が，『周囲の人の要求を満たそうとして―普通それが成功することはないのですが―その任務を完璧に遂行することで達成感をもつ』ことに焦点化されていたからです」（Gonzalez, 2020, p.36）．他者の問題の解決を支援することに注力するのが仕事であるソーシャルワーカー等の対人援助職は，自らが燃え尽きないためにも，このアドバイスに充分耳を傾けていくことが求められてくるであろう.

7） 心の「傷」の存在がその当人の行動を大きく左右する，とも考えられる．皮膚上の「傷」の場合，実際にその「傷」を負ったときや，またそれがいわゆるかさぶたができて治癒しかかっているときでも，当人はそれ自体に触れられるのを意識的にも無意識的にも，回避しようとするだろう．このようなことは，心の「傷」の場合でも当てはまるだろうし，触れられることを最大限回避するような行動をとるだろう．またそういった場合には，当人はそのことに対してかなりのエネルギーを費やすこととなり，消耗していくこと必至である．管理者（マネジャー）には，このようなことについて，充分に理解しておくことが求められてくる.

引用文献

青木省三（2020）. ぼくらの中の「トラウマ」―いたみを癒すということ― 筑摩書房 .

Bistek, F.（1957）.*The Casework Relationship*, Loyola University Press.（1996 尾崎新・福田俊子・原田和幸 訳 ケースワークの原則（新訳版）―援助関係を形成する技法― 誠信書房 .）

Bowlby, J.（1988）. *A Secure Base : Clinical Applications of Attachment Theory*, Tavistock/ Routledge.（1993 二木武 訳 母と子のアタッチメント―心の安全基地― 医歯薬出版 .）

Gonzalez, A.（2018）. *It's not me : Understanding Complex Trauma, Attachment and Dissociation*, The English Agency（Japan）Ltd.（2020 大河原美以 監訳 複雑性トラウマ・愛着・解離がわかる本 日本評論社 .）

花丘ちぐさ（2020）. その生きづらさ，発達性トラウ

マ？―ポリヴェーガル理論で考える解放のヒント― 春秋社 .）

Hochschild, A.（1983）.*The Managed Heart : Commercialization of Human Feeling*, University of California Press.（2000 石川准・室伏亜希 訳 管理される心―感情が商品になるとき― 世界思想社 .）

Kain, K. & Terrell, S.（2018）. *Nurturing Resilience : Helping Clients Move Foward from Developmental Trauma , An Integrative Somatic Approach*, North Atlantic Books.（2019 花丘ちぐさ・浅井咲子 訳 レジリエンスを育む―ポリヴェーガル理論による発達性トラウマの治癒― 岩崎学術出版社 .）

（Kimberley）, D. and Parsons, R.（2017）. Trauma-Informed Social Work Treatment and Complex Trauma, Turner, F.（Ed.）*Social Work Treatment, 6th ed.*, pp. 553-73. Oxford University.

Kunda, G.（1992）. *Engineering Culture : Control and Commitment in a High-Tech Corporation*, Temple University.（2005 金井壽宏 監修 洗脳するマネジメント―企業文化を操作せよ― 日経 BP 社 .）

Mirabito, D.（2017）. Social Work Theory and Practice for Crisis, Disaster, and Trauma, Turner, F.（Ed.）*Social Work Treatment, 6th ed.*, pp. 117- 30. Oxford University Press.

大河原美以（2020）.「監訳者まえがき」アナベル・ゴンザレス 著 大河原美以 監訳 複雑性トラウマ・愛着・解離がわかる本』pp.1-2. 日本評論社 .

Page, T.（2017）. Attachment Theory and Social Work Treatment, Turner, F.（Ed.）*Social Work Treatment, 6th ed.* , pp. 1-22. Oxford University Press.

Porges, S.（2018）. *The Pocket Guide to the Polyvagal Theory : The Transformative Power of Feeling Safe*, W.W. Norton & Company Inc.（2018 花丘ちぐさ 訳 ポリヴェーガル理論入門―心身に変革をおこす「安全」と「絆」― 春秋社 .）

Voss, T. and Nguyen, A.（2019）. *Where War Ends : A Combat Veteran's 2,700-Mile Journey to Heal*, New World Library.（2021 木村千里 訳 帰還兵の戦争が終わるとき―歩き続けたアメリカ大陸 2700 マイル― 草思社 .）

（2021.8.17 受稿，2021.10.28 受理）